一休宗純研究ノート（三）

――『一休水鏡』から『一休咄』へ（上）――

飯塚大展

はじめに

一休宗純（一三九四～一四八一）の著作として、筆者が認識しているのは『狂雲集』『自戒集』のみで（『一休下火録』もあるが）、他のそれは後代における仮託と考えている。『一休咄』以前には、例えば一休に仮託された「仮名法語」として、近世初頭からその前半にかけて成立した『一休水鏡』『一休骸骨』『一休和尚法語』『阿弥陀裸物語』『仏鬼軍』等がある。[1]

『狂雲集』や『自戒集』において展開されている一休宗純の詩的世界は、その内面が様々な屈折を経てではあるが投影されていると考える。私はしばしばその虚構の迷路に迷い込み、自己を見失ってきた。それは一休と同時代の人間にとっても同様であったのではないかと邪推する。

一休の文学的表現は漢詩文に依拠するものであり、中国文化の日本的受容であると同時に、主に中世日本における禅林の文学と学芸との伝統の上に立脚している。同時代の人々によって一休の偈頌が、五山の禅林の文学と対比的に評価される事は多くはなかった。『狂雲集』に対する文学的評価は、少なくとも近世前半おけるまでなされてはいなかった。実は近代以降、『狂雲集』への関心は高まったのであり、その注釈的研究史については省略するが、今日『狂雲集』の読解は、柳田聖山、平野宗浄、蔭木英雄、各氏の信頼すべき注釈によって、より深く精細になされつつある。[2] 注釈的研究が進み、『狂雲集』の詩句の典拠が明らかに成った現状においては、更にその仏教的教養の範囲と内容とが吟味されねばならないと思う。一つには、一休は終生林下大徳寺派の禅僧としての立場を離れてはいないのであり、その参学は当時における公案禅と無縁のものではなかった。確かに一休は、法兄養叟宗頤およびその高弟春浦宗熙の入室

参禅による得法の安売りを口を極めて罵倒しているが、禅者が真摯に公案に参ずることを否定しているわけではない。[3]一休の禅籍に関する知識は、原典の理解はもちろんであるが、当時における註釈書（抄物）等も参看すべきものと考える。一休が好んで描く中国の祖師達のイメージも、五山や林下における理解の類型と比較検討が必要であろう。祖師像に対する賛も多く見られると言うことも考え合わせなければならない。この点については、京都・鎌倉の五山を中心として広がった詩画軸の盛行を念頭に置く必要があろう。又、その習学時代を五山叢林で過ごした一休の文学的素養についても、漢詩文の隆盛という時代的背景を考慮しなければならない。その意味からも、五山（禅林）文学の中で『狂雲集』を位置づけることの意味は、重要と思われる。

また、一休の評価に関して言えば、風流・風狂の僧として肯定的に扱われることが多いと思うが、『自戒集』における内容はほとんど取り上げられないのが現状である。[4]確かに成立に関する問題もあり、内容的にも今日の人権意識からすれば、障害者差別・職業差別・女性差別の甚だしいものであるが、中世における禅僧の業報感、浄穢観念を知る上で極めて貴重なものである。[5]私自身は、『狂雲集』と『自戒集』には、「示榮衒徒法語」をめぐる一連の作品において、通底する論理があり、一貫性があると考えている。[6]詩偈については、その体裁をなさない、猥雑なもの（狂詩）であるが、一休の一面を語るものとして、今後考察して行きたい。

二、一休像の変容

一休の生涯の事蹟が語られる際には、『一休和尚年譜』（示寂後間もなく弟子達によってまとめられた行状。以下『一休年譜』）が用いられるのが常である。『一休年譜』は、一休の生涯を考察する際の第一の伝記資料と言える。『一休年譜』については平野宗浄氏による訳注や今泉淑夫氏の注釈があり、信頼できるテキストが容易に参看できる状況にある。[7]『一休年譜』の記述を中心に、それを補完する形で、『狂雲集』の制作年代が特定もしくは推定される作品の内容が伝記として叙述されるのが一般的である。私は、中世における林下大徳寺派の僧侶としての一休像を得るための一つの方法であるとは考えている。しかしながら、『一休年譜』は、風狂風流の僧としての一休を叙述しようとしているのではなく、大徳寺派の正統に属する偉大な禅僧としての一休を描き出すための潤色がなされていることを斟酌すべきである。それは、一休会下の弟子達にとってあり得べき一休像に近く、一休が生きた（若しくは生きんとした）世界観と

は必ずしも一致しない。自らが著した『狂雲集』の中で批判し続けた印可に関する記事や投機の偈の記事等には、その真偽について慎重な配慮が必要かと思われる。

これ以後、まとまった形での一休の伝記に関する著作は存在しない。寛文年間に『一休咄』（寛文八年〈一六六八〉刊）『一休諸国物語』（寛文十二年〈一六七二〉刊）『一休関東咄』（同年刊）等が刊行される以前には、狂歌咄や仮名草子等に部分的に幾条かが引用されるのが、そのほとんどであった。(8)

これらの仮名草子に見える一休の逸話の典拠については既に岡雅彦氏の研究があり、贅言を弄するまでもないが、私としては一休のアウトラインをより明確にしたいという思いから本稿を草することとした。特に岡氏の『一休ばなし〈とんち小僧の来歴〉』に依拠すること大である。

以下、『一休咄』に入る前に、断片的ながら同時代の人間による一休の評価について触れてみたい。

心敬僧都の『ひとりごと』には、

詩・連句は、昔は、公家に専らの事にて侍しかども、家をとろへて、近世には、禅覚たちの中に、名匠、其数これ多く侍る。中にも、近き世には、南禅寺惟肖和尚、大方、日本にて二三百年の此方、並べて言ふべき人なし。最一の作者と申あへりし。此世年先まで在世の人なり。其後は、建仁寺心田和尚とて並びなき詩人、世間許し侍る也。是も、十年ばかり前に失せ給へり。今の世にも、いかばかりの名匠たち、渡るめれども、其人ばかりは聞え侍らずや。禅門修行の名匠たち、数を知らず聞え侍れども、今の世に、行儀も心地も、世の中の人には替り侍ると聞えぬるは、一休和尚也。万のさま、世人には、はるかにかはり侍ると、人々語り侍り。此門流に、和泉の堺にて果給ひし南江、秀たる詩人と申あへりし。是も行儀心地異相不思議の人といへり。十年斗先に失せ侍り。

しばしば引用される一文だが、心敬僧都にとって、当代きっての詩人として位置づけ得るのは、五山僧の惟肖得巌、そして心田清播である。五山における漢詩并びに和漢連句の隆盛を念頭に置くならば、妥当な評価となろうか。一方、その行儀振舞い、心映えにおいて人と遥かに変わっている人物として、一休が取り上げられており、同様の人物として、五山僧でありながら一休会下に参じた南江宗沅が位置づけられている。上記の記事は、一休の風狂・風流の僧としての一面が好意的に取り上げているが、必ずしもそれが大方の評価であったわけではなく、『狂雲集』・『一休年譜』に見られる矯激な言動を常軌を逸したものと見る評価もあった。

お茶の水図書館蔵『蒲室麟書』（三巻三冊、室町中期写本）は、文明十年七月以前から同十四年十二月にかけて建仁寺

内においてなされた「蒲室疏」（禅林における四六駢儷文の教科書）の講義録ノートだが、その一節に次のように見える。[9]

「為怪譎ハ、異形ナリヲスルソ。純一休徒黨ナントソ」（下冊、73オ）

同時代の五山僧より発せられたこの一句は、当時の五山叢林における一休の評価を想像させるものであり、一休やその派下の僧達の異形な姿は、五山という体制（権門）の中に生きる常識的な僧の耳目を驚かせたものと思われる。

次に林下大徳寺派において、一休はどのように評価されてきたのだろうか。一休は、法兄養叟宗頤、その高弟春浦宗熙を、『狂雲集』や『自戒集』において、禅を世渡りの道具とする「栄衒徒」として弾劾している。一方、大徳寺派の主流を形成した養叟派側からの一休批判はあまり触れられることがなかった。ちなみに、日本禅宗史の観点からすれば、養叟および春浦の評価は、一休が下したそれとは異なるものがある。以下、『大徳寺夜話』（龍谷大学図書館蔵）によって少しく見てみたい。[10]

①一、一休ハ、古則八十則ナラテハ参セヌト云レタ。碧岩ハ三十則参タ。其支證ハ、人ニ三十則書テ出タ。此内ヲ問ト也。養叟ハ、一休ノ風顛漢ヲハ不嫌、師家ニ不問古則ヲ推着テ、心得頻ヲスルヲ嫌タ也。

②一、一休透西洞院時、有問、市中還有隠麼。云、有。僧云、如何是市中隠。云、何似生。比興ナル答話也。是ニ合テハ、有ト答タハ、セメテチヤト、先師ノ仰ラレタ。有照問一休、生死到来時、如何回避。云、上無攀仰、下絶己躬。大照禅師（養叟）聞之、仰ラレタ。一休ニハ、似合タ答話ソ。是程ノ事ヲモ不知。小魚呑大魚。一休下語、ヤマガラ胡桃ヲマワス。又、後園驢喫草。云、是等ノシヤレ事上手也。大宗禅師（春浦）、聖諦第一義。下語云、頻ニ似テヘソマク。一休垂示下語ニ、吹面不寒楊柳風、ト云句ヲ着ラレタ。弘宗禅師（華叟宗曇）云、師家ニ向テ可使句サヘ知ヌトテ、座敷ヲ逐立ラレタ。天潤庵ノ密伝ハ、無文字僧也。住堺禅通寺時、山門仏事ノ韻ニ、三踏通之字。一休和尚云、北有禅通、南有大通、新長老、讃、一文不通。

無着道忠に拠れば、『大徳寺夜話』（以下『夜話』）は養叟派下に相当する古岳宗亘（一四六五～一五四八）によって著されたとされている。『夜話』には、徹翁義亨―言外宗忠―華叟宗曇―養叟宗頤―春浦宗熙を軸にそのエピソードが取りあげられており、中でも弘宗禅師（華叟）、大照禅師（養叟）、大宗禅師（春浦）の記事が多く見られる。従って、上記の一休に関する記事は、養叟側からの一休の評価として、貴重なものと言える。因みに『夜話』に関連する史料とし

ては、駒澤大学図書館所蔵『宝山紀談』等がある。養叟が師の華叟宗曇に参じて印可を得たことは、一休は驀向から否定しているものの、大徳寺文書により確認できる。また、教学的にも、大徳寺派「密参録」や大徳寺派の「語録抄」（大東急記念文庫蔵『碧岩集古抄』（同系統の諸本に叡山文庫所蔵本、江戸時代初期版本）、お茶の水図書館蔵『江湖風月集抄』〈同系統の諸本に両足院所蔵本、足利学校遺跡図書館蔵本がある〉）等に養叟以下の下語がしばしば引用されることからもわかるように、彼らは指導的立場にあって、後世に大きな影響を与えている。[11] 養叟の眼からすれば、一休の禅者としての教学的素養の欠落は、批判の対象となったと思われる。①に関していえば、養叟が下した評価、一休が風顛漢であることを嫌うのではなく、師家に参じてもいないくせに知ったか振りをするのを嫌うのだという言説は、興味深いものがある。②については、黄梅院所蔵「垂示」（『大徳寺禅語録集成』第四巻所収）にも同様の記事が見える。

僧問一休、市中還有隠麽。休云、有。僧云、如何是市中隠。休云、何似生。後大用聞、大不肯。師代云、擒住、速道々々。定此僧擬議。便托開更参卅年イワン也。

次に『一休咄』等に頻出する当意即妙の機知や軽口の記事にイメージが重なる、「シャレ事上手」と言う評価も注目に値する。

一休の伝承については、密参録の中にも見出されるが、例えば駒澤大学図書館所蔵『百則密参録』には、以下のように見える。[12]

△蛾眉中峰民和尚、罷講而至。圓悟夜参ニ挙ス、僧問岩頭、古帆未掛時如何。頭云、後園驢喫草。民茫然不知落処。告悟、々曰、你問我。民乃問、古帆未掛時如何。悟曰、庭前栢樹子。民遂大徹々々、大恵武庫。

○小魚呑大魚。

一休ノジヤレ下吾ニ云、男子生女子。又、山伽羅胡桃ヲ舞ワス。

弁、胡桃ノ、クル〳〵舞処ヲ、輪廻顛倒、又ハ、逆ノ方ニ用タ。

○後園驢喫草。

一休ノ下吾云、猿盗栗。

弁、是色相ノ順也。

先師物語、見識ノキレヌ者ニハ、袈裟草鞋ヲ裏テモ見セフズ。昔シ、王ノ弟アリ、一休ノ會下ヘ走リテ、沙弥ヲ歴ント被仰タ。一休、華叟ヘ参上ラル、時、此沙弥ニ足ヲ洗セラレタ。此時、袈裟ヲ以テ、足ヲ拭シラレタト、昔ヨリ語リ傳ヘタ。

このような評価は、江戸時代初頭に成立した大徳寺派の垂示の記録にも見ることが出来る。例えば『龍嶽和尚葛藤』[13]

には、

①「蜷川不白歌云、
　広沢ノ池ノ心ハ知スシテミル人モナキ秋ノ夜ノ月
師代云、万里一條鉄。
又云、
　此歌ノ心ハシラデオソラクモ釈迦ト達磨ト定家々流（脱カ）
一休云、
　此歌ノ心ハ知ラデオソラクモ釋迦ト達磨ト定家々流、」

②「太田道觀問一休云、御僧ハ、破夏何ノ處ニカ行ク。休答云、廊下ニドシメクハ、何事ゾ。觀問云、寺ノ名ハ。休答云、法界寺。觀云、本尊ハ。休云、虚空藏。觀云、御僧ノ名ハ。休云、自由自在。觀云、扇子ヲ出シテ御座アレ。休云、ヌシガマヽヂヤ、イヤ。觀云、御僧、寺ハ。休云、紫野。觀云、佛法ハ。休云、桔梗カルカヤヲミナヘシ。

③「新年頭佛法、生耶死耶、休云、生也不道、死也不道、答、離生死一句、休云、住虚空、答、空無壁、坐住什麼處、休、空而住空、
如何是殺生戒、斬ツハツ、骨ト皮トニハナサヌカ、
如何是偸盗戒、ソラ吹ク風ヲハ、ヌスマヌカ、
如何是邪婬戒、カナメト〳〵チギラヌカ、
如何是妄語戒、虚言ハナイカ、
如何是飲酒戒、ヒトサシ舞テ、酒ハノマヌカ、
如何是紫野佛法、一休云、桔梗カルカヤオミナヘシ、色々ヲハ、何ト染タルゾ、休云、夕ノ嵐今朝ノ露、離色一句、休云、問着春風総不知。

②の話は、『醒睡笑』巻八、『一休はなし』巻一第四話、『延宝伝灯録』巻三五等に類似の話が見え、③の話は、『一休咄』巻四第十話に見える。

大徳寺派の垂示の史料は、洞門抄物の「代語」と同じ性格を有し、それは説法上堂に代わるものとして公的な色彩を有するものであった。また垂示は、語録抄や密参録などにも取り上げられているように、語録の講義や、公案に対する解釈、特に下語・弁といった師資間の商量の中で成立したのではないかと考えられる。しかし同時に、叢林生活の合間にふと交わした先師に関する雑談が肩肘張らぬ逸話として口伝として伝えられたとも考えられるのではないか。特に後者は「夜話」として位置づけられたと思われる。更に叢林における哄笑広言は、禅僧の個性として認識されていたと言えば、言い過ぎであろうか。

『自戒集』に見られるような露悪的表現が、一休宗純というある種異質な禅僧の個性に基づく孤立的な表現なのかと

いう問題が残されているが、今は触れない。駒澤大学図書館所蔵『大円禅師夜話』[14]には、一休宗純について言及する一条がある。

華叟和尚ハ、遂平僧テ過サシマツタソ。堅田之正通庵ヲ授老ソ。養叟、一休ハ正通庵テノ會下ニ有タソ。華叟遷化後一休暫在養叟會下ソ。未休明テ出テ、立一派ソ。大用テ打米時一休ハ衣物ヲ腰カラウテ打タソ。後ニハ衣物カタレサカツテ、大ナルマラヲ打振テ、タツタ打テ々々ト云テ打タソ。メイヨノスマラ也。春浦和尚常ニ咲テ話ソ。

これによれば、一休宗純と養叟宗頤とは、共に堅田の正通庵に住した華叟宗曇の会下にあった。華叟示寂後は、一休は養叟会下にあったが、まだ大悟了畢する以前に袂を分かって一派を立てた。一休がまだ養叟会下に在った時のこと、ある日大徳寺内の塔頭である大用庵において打ち米をして、法衣を絡げて打っていたが、その内着崩れて、大きな魔羅（陰茎）を打ち振るって「たった打て打て」と言って打った。養叟の高弟の春浦宗熙は、いつも笑い話にこの出来事を取り上げた、と言う。この一事をもって断ずることは出来ないが、「垂示」には『自戒集』と共通する表現の形式があると思われる。

実は一休が未悟であるという評価は、林下曹洞宗の禅籍抄物（洞門抄物）の中にも見出せる。巨海良達（〜一五九九）の「代語抄」である『巨海代鈔』（承応癸巳〈一六五三〉刊、架蔵本）には、以下のように見える。

養叟ハ、大徳寺ノ先師、一休ノ為ニハ師兄（スヒン）デゴザ在ツタガ、宗純アマリニ生（ナ）マ得道ニ犯（オカ）サレテ、テガラメクト云テ、狂歌ヲヨマレタ、

瀬ハ鳴テ深キ渕ニハ音（ヲト）モナシ同ジ流レノ溪（タニ）川ノ水

（上巻）

洞門抄物においても、一休の狂歌の引用は比較的よく見られる。ちなみに、『一休咄』との狂歌問答に連なると思われる記事が、扶桑大暾（〜一六四五）の「本則抄（再吟）」である『扶桑再吟』（承応三年版本、架蔵）に見え、一休の狂歌が引用されている。

心ハ、是ハ先ヅ一休宗純ノ白拍子ニ嫁嫂（懸想ノ宛字カ）セント行カル、処ヲ、ミナ川（蜷川カ）ノ新衛門拶云、大善知識為（シテカ）二甚麼（ト）一入（ルニ）無間（ニ）一。

純答云、

地水ハ月ハ夜ナ〳〵通ヘ共光リモヌレズ水ニ跡トナシト對セラレタト云ガ、指シテ其レニ用所ハナイ、澄ミ切ツタ池水ニ月光朗々ト照ラシタガ、地水モ照ラサレタト知ラズ、水ニ跡トナイ事タゾ。処コソ不識上ヨ。（下略）

『狂雲集』や『自戒集』によれば、一休派下に参じた林下曹洞宗（道元派下）の禅僧があったことが知られているが、その一人に比定されるものに秀峰存岱（生没年未詳、明応六年〈一四九七〉相模最乗寺に晋住）がいる。存岱には、『碧巌休岱記』（叡山文庫蔵）があり、その奥書には、「竜江（谷か）院開山秀峰存岱書記／於紫野一休参得之也」とある。[15]この抄物は、書名から類推すれば、存岱が一休に参じた『碧巌録』についての本参資料と言うことになるが、江戸時代前期の写本であり、検討を要する。しかしながら、同様の記事が、『快庵派門参』（栃木県大中寺所蔵）に「佐竹大山竜谷院開山存岱書記／於紫野一休順蔵司下ニ而得処也」（30オ）とあることからすれば、存岱が一休に参じた者であるという理解が江戸時代初頭には既に成立していたことがわかる。洞門抄物において、一休の記事は散見するのであり、洞門の禅僧に拘わる逸話として伝承されている。その評価は概ね名僧としての一休と言う位置づけである。例えば、山梨県永昌院蔵『龍石山開山大和尚下語』の奥書には、本文とは別筆で、以下のように記されている。

日域三蔵司、伊勢虎蔵司・紫野順蔵司・甲斐文英蔵司、於禁中蓋聞有之、云云。

これによれば、林下曹洞宗道元派下の伊勢浄眼寺開山大空玄虎（一四二八～一五〇五）、永昌院開山一華文英（一四二五～一五〇九）と共に、一休が「日域三蔵司」の一人として顕彰されている。[16]

このほかにも、大徳寺派の抄を幻住派の僧がまとめたと思われる駒澤大学図書館蔵『臨済録抄』（異本に足利学校遺跡図書館蔵本、叡山文庫所蔵本等がある）には、一休の投機の話が取りあげられている。[17]

一休純蔵主ハ、花叟ニ参シタ。西近江堅田ノ祥瑞庵ト云処ニ、花叟御入有タ。チト醫師ヲメサレタ。有時京へ薬ヲカイニ上セラレタ。薬屋ノ家へ入リサマニ、シキイニケツマツイテ、コロハレタ。其時香厳樹上ノ話ニ、徹セラレタ。其マヽ、皈テ、参ニ上ラレタ。花叟、薬ヲ御尋有タレハ、畏タト云テ、ヤカテ京へ上ラレタ。花叟ノ侍者ヲ喚テ、ヲレカ天目ニテ茶ヲ一服マイラセヨト被仰タ。是カ印可チヤト云。終印可無キ人チヤ。師承モ無ウテ、一代ニハタサレタ。兎角シテ、薬をカウテ皈ラレタ。堅田ヨリ上洛ノ路、四里半アラウス。今時ナラハ、イカニ徹シタリトモ、先薬ヲカウテ、帰ウスル。是モ為放忘身物チヤ。

上来大徳寺派の抄物史料を中心に、一休に関する種々の雑談（夜話）が伝承されていることを確認した。この伝承は史実そのままというわけではないが、同時代人が抱いた一休像の一端を語っているものと想像する。やがてこの伝

承は、『一休咄』の成立と共に素材として取り込まれたのではないだろうか。その影響関係の濃淡については、より精細な検証が必要であろうが、それは私の手に余る問題であり、碩学の示教を仰ぎたいと考える

上記の禅門における伝承とは別に、天台宗における直談抄系統の資料においても、一休の記事が見出せる。『法華経鷲林拾葉集』（永正九年〈一五一二〉頃成立）には、以下のように見える。

近比純蔵主ノ処へ白地ノ扇ヲ持テ来リ、是ニ賛遊シ候ヘト申ス時、軈テ押取テ書玉ヘリ

入境ノ力ナラバ温鈍ノ後越後ノ兎ノ雪中ニ走ル

斎藤未ダ鬢与鬢ヲ染ズ源氏指シ挙ル一中幡

ト書テタビ玉ヘリト。云云　（巻三）

墨染ノ衣ヲキタル色ミレバ世ワタリ人ノカザリナリケリ

名ニメデテ一休会下ニアツマレド一モヲレヌ我慢情識　純蔵主　（巻十三）

特に後者の「墨染メノ衣」の歌は、『醒睡笑』巻六「推はちがうた」、『かさぬ草紙』九十八段（神宮文庫蔵、寛永二十一年写）に類話類歌が見え、『一休咄』巻一「一休和尚いとけなき時、旦那と戯れ問答の事」に発展する。このように一休の歌として明示されているものの外に、後世の作品において一休の作とされたものが、『法華経鷲林拾葉集』には見える。一例を挙げれば、「仏とは何を岩間の苔筵唯慈悲心にしくものはなし」と言う『一休和尚法語』の歌は、『鷲林拾葉集』では、以下のように見える

當流仏云、智者・覚者、以智恵為本。誠衆生成仏體云、自受用本覚智体開名故、必以報身、可為教主。仍慈悲仏・智慧仏云事有之。能能可思擇。

仏トハ何ヲ岩間ノ苔筵心一ツニシク物ハナシ　（同右、巻一、二三頁）

『一休咄』成立以前に見える一休の記事については、上記の『醒睡笑』『かさぬ草紙』の外、『遠近草』、『月庵酔醒記』、『古今夷曲集』、『新撰狂歌集』と言った狂歌を中心とするもの（「狂歌咄」）の中に見出すことができる。

三、狂歌咄の系譜と『一休咄』

筆者は『一休咄』を狂歌咄の系譜に連なる文学作品と考えており、この観点からその成立以前の状況を少しく見てみたい。私見によれば、『一休咄』刊行以前から、一休の道歌（狂歌）は既に受容されていたが、とりわけ『一休水鏡』

の影響が大きかったのではないかと推定する。

寛文年間に『一休咄』をはじめとして、『一休諸国物語』『一休関東咄』が刊行されると、当意即妙の機智を遺憾なく発揮する一休の咄のモチーフには、「狂歌」、「道歌」と称される和歌が大きな位置を占めるようになった。禅籍抄物等にわずかに見える一休の狂歌作者としての一面がより明確になったと言える。

同時代の五山僧が記した記録にも、一休に関連する記事は見えるが、断片的であり、養叟・春浦の記事に比して分量的にも少ない。しかしながら、摂津堺に住した季弘大叔の『蕉軒日録』（文明十六から十八年の日記）には、比較的多くの記述が見え、その文明十八年七月十七日条には、

名にしほふ熟柿くささよ墻のもとに人丸ながら面は赤人

とあり、その成立状況は判然としないが、一休の狂歌が取り上げられている。また、多聞院英俊の『多聞院日記』によれば、一休の和歌が軸装され売買されていたことが記されており、『尤之双紙』上巻「三十八、細き物のしな〳〵」には、和歌とは限らないが、「一休の仮名、貫行が歌書」と見え、一休の仮名は特徴ある仮名書き（細い仮名文字）として、漢文の法語や頌古・偈頌を中心とする墨跡同様に高い価値を認められていたものと思われる。一休の狂歌の渕源はあるいはこの辺にあるのかも知れない。

狂歌話の系譜をたどるために、一休の狂歌咄を比較的多く引用している、神宮文庫蔵『かさぬ草紙』（寛永二十一年写）を最初に取り挙げてみたい。以下に本書に見える一休関連記事と、その類話とを掲げる。

＊テキストは『かさぬ草紙神宮文庫蔵』（京都大学国語国文資料叢書三、越智美登子解説、一九七七年刊）に依拠し、該当箇所の指摘もその頁数に拠る。

①

一、紫野の一休、盂蘭盆の比、一切精霊に手向とて、御歌に、

亡魂今日出来迎、雨露自供落葉棚。
灯明挑得天上月、松風流水作諷経。

山城のうりやなすひを其まゝに手向になすぞ加茂川の水

とあそはしければ、山しろのうりやなすひ木、俄に枯れけり。賀茂河の水も干やがりけると聞ゆ。不思議なりと、知るも知らぬも申あへりとなり。

（第九話、6オ～ウ、一三～一四頁）

【『月庵酔醒記』巻下】

七月十五日作

純蔵主

亡魂今日出来迎、雨露自ラ供ス落葉棚ニ
挑ニ得タリ天上灯明ノ月一、松風流水ハ諷経ノ声。
（一一四頁）

※テキストは『月庵酔醒記（上）（中）（下）』（服部幸造・美濃部重克・弓削繁編、三弥井書店刊）に依拠する。

『一休はなし』巻四第八話
［八、大内灯籠詩の事付性霊歌の事］

㊇、一休和尚の時代までは、方々の寺々より七月十四日には、大内へ灯籠をさゝげける。大徳寺にも開山大灯国師より、故ありてさゝげしかば、後々まで例になりて、やめがたくぞ有ければ、一休もこむつかしくや思しけん、ある時内裏へ灯籠上げるとて狂詩を一首作りて、其灯籠に相添へてさゝげ給ひけるは、

性霊今日出来迎。（性霊、今日出来迎）
雨露直供万葉棚。（雨露、直に万葉の棚に供ず）
挑得灯明天上月。（挑得たり、灯明天上の月）

松風流水読経声。（松風流水、読経の声）

とあそばしければ、御門御叡覧ましく〳〵て、「まことに一休の詩なるものを。やうなき灯籠を求めける也。自今以後、大徳寺よりも、何方の寺よりも、七月に灯籠をさゝぐる事有べからず」と仰出されけると也。

世の人、是を聞て、「扨も〳〵名僧かな。かゝる御こゝろざしにては、定而御寺には性霊祭はあるまじ。若あらば、さこそ変はりたる事にてや有べし。いざや人〳〵、一休の御寺へ参りて見物し、末代の語り句ともなすべし」と、四五人連れにてまいりて、一休へ御目にかゝり、「此間禁裏へさゝげ給ひし灯籠の詩、洛中にて、是のみ沙汰仕候。定てかゝる御こゝろざしにては、性霊祭もあそばし申すまじく候」と申ければ、「いや〳〵我等は三界の衆生を思ふゆへに、有縁無縁の悪鬼を祭りて、種々のものを手向くるゆへ、広大無辺なる性霊祭仕て候」と仰られければ、みな人案に相違して、「此御寺には見え申さず候が、いづ方にか御祭り候ぞ」と申ければ、「是より四五町わきを借りて候」と仰らる。皆人申けるは、「とてもの御ことに、見物仕度候。御人添へられ下され候へ」と申ければ、「奇特なることを言ひたまふ方々や。人までもなし、我等同道申すべし。水向けし給へ」と、まことしやかに仰られけ

れば、皆々よろこび、御跡につきて行ければ、東河原へ御出有て、「これ〳〵見たまへ」とて、両方の御手を広げ給ふ。みな々々、「どこもとにて候ぞ」と、うと〳〵しければ、一休、「これ見給へ」とて、くる々々と舞、手を広げたまへ共、みな合点せざりければ、「おの〳〵は見物はなるまじきぞ。言ひてきかすべし。たゞ耳にてお聞あれ」と仰られければ、みな人あきれて、立居りて聞ければ、一休一越調をあげて、仰られけるは、

山城の瓜やなすびをそのまゝに
　　手向になれや賀茂川の水

「聞給ひけるか。是大なる性霊棚にてはなきか」と仰られければ、皆人「扨も〳〵、いや共いはれぬ御意や」とて、感にたへて帰りけり。

（『一休和尚全集』第五巻、一二九～一三二頁）

①の話は、『月庵酔醒記』巻下では狂詩のみが、『かさぬ草紙』では狂詩と狂歌が取り上げられ、更には『一休はなし』巻四第八話「大内灯籠詩の事、付性霊歌の事」においては、狂詩と狂歌が詠ぜられた場（背景）が描出されている。これを原型からの展開と見るならば、そこには『一休咄』の作者の創作態度が垣間見る事ができるように思う。

②

一、紫野の純蔵主の辞世
　借用申地水火風
　返弁申今月今日
　かりをきし五つの物を四つかへし
　　本来空に今ぞをもむく
　生死去来、棚頭傀儡〈傀儡トハ、デクル坊ノコト也〉
一湶〈湶は線か〉軒〈軒は截か〉事、落々磊々
　いつの日のいつの時にかでくる坊
　　めくり〳〵てはてはかつたり
　しきしまにあそぶ手つさの糸切て
　　ころぶすがたはもとの木のきれ
　　天下老翁一休居士判

是一休の直筆にてあり。かとうひことのたからものにてありけれとも、江戸将軍様へ上りたる也。

（第五三話、24オ～ウ、一四七頁）

【『一休咄』巻四第十三話】

［十三、一休末期辞世の事］

十三、一休和尚の末期の句とて、世の人の口にまかせけるは、其数多し。是が実也、是は不実也といふも、不実也。如何とならば、彼も御影を書て、

賛を求め、是も賛を求むれば、其賛には、出るまゝにあそばしけると也。

ある所の御影の賛にあそばしけるは、

朦々而三十年。（朦々として三十年）

淡々而三十年。（淡々として三十年）

朦々淡々六十年。（朦々淡々六十年）

末期晞糞捧梵天。（末期は糞を晞って梵天に捧ぐ）

此句々もあり。又の語には、

借用申昨月昨日。（借用申す昨月昨日）

返弁申今月今日。（返弁申す今月今日）

借置し五つのものを四つ返し本来空にいまぞもとづく

又ある末期とやらむにあそばしける、とて人の言へるは、

生也死也　（生や死や）

死也生也　（死や生や）

柳は緑、花は紅

喝

柳不緑、花不紅　（柳は緑にあらず、花は紅にあらず）

御用心々々

一休筆題

（『全集』第五巻、一四二～四頁）

【『古今夷曲集』巻十、釈教】

「借用之地水火風、返弁申今月今日」といふ

前書きにてよめる歌

1045 借りをきし五つの物を四かえし本来空に今ぞ趣むく

（岩波新古典文学大系、四六四頁）

【『寒川入道筆記』】

一、古句古哥

生死去来　棚頭傀儡　一線断時　落落磊磊

いつの日のいつまて爰にてくるばうまハし〳〵てはてハかつたり

（『咄本体系』第一巻、一九頁）

【『夫婦宗論物語』】

それ経にも、独生独死、独去独来は世の習ひ、独来て独去るは無常の掟遁れ難し。此心を歌には、敷嶋に遊ぶ手ずしの絲切れて転ぶ姿はもとの紙切と詠み、有為の泡影は眼前の境界疑ふべからず。

（寛永版、岩波古典文学大系『仮名草子集』

二三三頁）

【『後撰夷曲集』巻九、無常】

一休和尚

1434いつの日のいつの時にか出来る房めくり〳〵て後はかつたり

【『似我蜂物語』下】

一、又一休和尚の哥に、

世の中の人ハでくるぼあやつりて

まはしまはせばのちはがつたり

予が云、「過去の縁と云物有て、かりに性をうけて、人界に生れ、でくるぼのごとく、我もなきものなり。なきと云ものもなきものなり。しからば、わきから有の無きのと云物もあらんや。爰にいたりて、あしく修行すれば、無の見におちると申候」。

（一七九～一八〇頁）

②の話（第五十三話）は一休の辞世の句をめぐる話であるが、その前半部分は『一休咄』巻四第十三話「一休末期辞世の事」に引用されている。『一休咄』の記事が当時の状況を正しく叙述しているかは不明だが、私見によれば、真偽は別として一休の辞世の句とされるものが幾つか伝承されていたものと推定する。「かりをきし……」の狂歌は、『古今夷曲集』巻十釈教（1045）に見える。後半部分は「いつの日の……」の歌を欠くが、『寒川入道記』に類似し、歌は『後撰夷曲集』巻九無常（1434）、『似我蜂物語』下に見える。又、「しきしまに……」の歌は『夫婦宗論物語』（寛永版）『銀葉夷歌集』歌（1024）に見える。

③

一、むかし百万返へ一休御出有て、さま〴〵御はなしありける所へ、有人、斎米と、卒都婆にてと板一枚持て来りけり。急ぎざませて、百万返あそばし給ふ。

一念弥陀仏、即滅無量罪、増て百万返をや

とありければ、此亡者果報の者也。成仏は疑なしと上人申たまへり。其後、盃出て、一休ことの外酔たまひて、帰るさに、百万返のおもての白壁に

成仏は一念弥陀と聞物を

百万返はむやくなりけり

と落書被」成けり。百万返の上人、是をみたまひて、腹立たまひければ、一休酒の上のことなればとて、詫たまへり。やがて中なをり有けるとなり。

（第五七話、26ウ～27オ、一四九頁）

③（第五十七話）は一休が酒に酔って、百万遍の上人の

言葉を逆手にとって落書を壁に記した話であるが、この話は『一休咄』には見えない。但し百万遍を舞台にした話としては、『一休咄』巻一第八話「同、詩歌を作りて蛸を食ひ給ふ事、付吐却の事」、『百物語』巻上第十九話がある。

④

一、紫野の一休あそばされ候歌

しやかといふいたづら物か世に出て

おほくの人をまよはするかな

（第八八話、42ウ、一六二～三頁）

【『一休水鏡』】

後掲

【『一休諸国物語』巻四第一話】

後掲

④の狂歌は『一休水鏡』、『一休諸国物語』巻四「一休、未来物語り」に見える。

⑤

一、又一休、死人のかたみにとて、五輪を立たりしを御覧じて

後の世のかたみに石かなるならば

ごりんのだいに茶うすきりをけ

（第八九話、42ウ、一六三頁）

【『古今夷曲集』巻十、釈教】

（一休和尚）

1034 なき跡のしるしに石がなるならば五輪の代に茶臼切れかし

（岩波新古典文学大系、四六一頁）

⑤もまた『一休水鏡』他諸書に見え、『かさぬ草紙』と『一休水鏡』との影響関係を見ることができる。

⑥

一、山田大路殿に大仏事ありける、時に上人立あまた座上になみゐたまへり。爰にやれかみこにやれ衣きたる入道きたりて、上人たちの真中になをる。これはいかなる事とて、人々よりてひきたてけり。かの入道座上にむかひて

あるそとよ心のうちはすみそめの世わたり衣うへにきすとも

といひけれは、上人立うともむとも返事なし。入道さしきをさりて帰りにけり。有人申けるは、此ほとむらさき野ゝしゆん蔵主しゆきやうにいてさせ給へるときく。定てしゆんそうすにてあるへしとて、おつかけさせけり。八日市場にて追付て、さまゞ〳〵留めけれとも、とまらすいなせたまひけり。しゆん蔵主なりと後にはしれり。

（第九八話、47オ～48オ、一六七頁）

⑥の話は、『醒睡笑』巻六「推はちがうた」では装いが白衣（俗衣）となっており、『一休咄』巻一第一話の「着て来たぞ……」の狂歌に連関する。伊勢国度会郡に住する山田神人（外宮周辺に居住）の仏事法会において、破れ紙衣に破れ法衣を着た一休が居並ぶ高僧に向かって詠んだ歌は、痛烈な批判を含んでいる。

【『一休咄』巻一第一話】

「一　一休和尚、いとけなき時、檀那と戯れ問答の事」

（上略）亭主も口を閉ぢ侍るが、「何がなお小僧に不審申さん」とて、又曰く、「凡沙門の形といつぱ、忍辱二躰の衣を着、罪障懺悔の袈裟を掛けてこそ、僧とは申すべけれ。いかに小僧なりとて、俗衣の出立心得難く候」と申せば、一休幼けれ共、歌一首よみて答られける、

着てきたぞ本来空の黒衣
　袖長からで人こそは知らね

と侍り給へば、旦那も養叟も手を打ち、口を開いてふさぎかねられけると也。

（『全集』第五巻、二頁）

【『醒睡笑』巻六「推はちかふた」】

一、一休伊勢の浅間にしばらく住山ありし。常ならぬ人の様にさたしあへり。山田の宿老たる人、親の心ざしをつとむるとき、斎をまいらせけるに、白衣にてわたらせ給ふ。みるから驚き、「これはいなものや。不思儀の風情なるかな」とさゝやきぬるをきゝて、斎了に硯と紙を乞、

きたりとよ心の中の墨染を世わたり衣うへにこそきね

（岩波文庫、六一頁）

『法華経鷲林拾葉鈔』巻十三

次ニ柔和忍辱衣ト者、兎モ角モ随順シ人ニ不レ背、柔和ト云也。我慢常識ノ上ニ所レ着衣、非ニ実ノ衣ニ、俗典等ニモ、礼ノ用ハ和ヲ為レ貴ト矣。

黒染ノ衣着タル色見レハ世渡リ人ノ厳リ成ケリ

名ニメテゝ一休会下ニ集レト一ツモ休ヌ我慢情識　純蔵主

（叡山文庫蔵本、臨川書店刊、一七二頁）

⑦

一、紫野の純蔵主、髪を長くはやしてゐたまひけり。

旦那衆、是を見て、髪を剃らせられてしかるべからんとて、意見をいひければ、純蔵主よめる。

そらずとも心のうちはすみ衣
かうべのうへはとにもかくにも

とありければ、旦那衆笑て礼拝す。

（第一〇五話、52オ、一七〇～一頁）

⑦の話は、⑥の話に連関し、俗体（外面）と法体（内面）とを対比的に把握し、歌に詠じている。一休は禿頭に法衣を纏ったものが真の出家者とは限らない、表面的なものよりも内面こそが出家者かどうかを規定するとしているのであり、同時代の仏教を批判する一休像が提示されていると言えようか。

この外にも、一休咄に関連するものとして以下のものがある。

⑧

一、中むかしの事なるに、ちくさいといふ藪医師、なごやにあり。誰も人知らざる故、かくよみ看板に置く

扁鵲や耆婆にもまさるちくさいを人しらぬぞあわれなりけり

と侍りければ、若き衆返しに、

扁鵲や耆婆にもまさるちくさいを釈迦にあはせぬのこりおゝさよ

（第七四話、35オ～ウ、一五六頁）

⑧の話は、『一休諸国物語』巻四「第十四、宅斎が事」に類話が見える。

第十四、宅斎が事

○一休、在世の比、京に、宅斎、と申医者あり。我と我身を高慢し、「恐らくは、我程の名医、又、二人共有まじ」などゝ、思ひけれども、人、許さねば、詮方なく、されども、人に知られんため、「なれば、粟田口は、往来出入の道筋なれば、こゝに、札を立てべし。是を旅人に見せなば、故郷に帰り、彼是に話さんには。扨は、都にさる者あり、と知るべし」、と思ひて、札の表に歌を一首、書けり。

へんじやくやきはにもまさる宅斎をしらぬ人こそあハれなりけれ

かやうに、書き立て置きけり。

一休、通り見給ひて、やがて添え書きをぞ、し給ふ。

へんしやくやきはにもまさる宅斎をしやかにあハせぬのこりおほさよ

（『全集』第五巻、三二三頁）

⑨

有人ひとり子に離れて、道心を起こし侍に、柴かき結

び住居けり。年寄りたる人、見舞にとて濁酒を持参り、むかし今物語致し、互に懺悔物語申けり。先持参の濁酒をひらかんと出しける時、道心者、

懺悔とは心をすますものなるに濁酒をば何と飲ままし

とありければ、見舞の衆、

懺悔して飲むべき物は濁酒とても浮世にすむ身にもなし

と詠みて、やがて酒をぞひらきけり。

（第七八話、36ウ～37オ、一五七～八頁）

⑨の話は、『一休関東咄』巻下「第十一、一休山居し給ふ時、濁酒の問答の事」にみえる話であり、この話については後述する。

次に、『一休水鏡』の受容という視点から考えてみたい。『一休咄』巻四第九話「一休、御袋へ御すゝめの事付歌少々」に

㊉、一休和尚の御袋は浄土宗にて有しとかや。一休つねに仮名法語書て遣はし、又は水鏡という草子を送りて、道を教へ給へ共、しかく御悟りもなく、明暮たゞ念仏のみにて過し給ふ。（下略）

（『全集』第五巻、一三二頁）

とあることから、一休和尚の母は浄土宗の信者で、一休はその母のために『一休水鏡』を送って道を説いたことが記されている。

更に『一休諸国物語』巻四第一話「一休、未来物かたり」は、『一休水鏡』の翻案であることは明確である。

第一、一休、未来物かたり

○或人、一休に問云、「人は、死て、体なくなり果つれ共、魂は、とゞまると申が、さやうにてもあるまじきは、魂が死なずにあらば、体ハなく共、やはり其まゝ居て、物語りなどもしさうな事にては、あるまじきか。何れ不思議なる事にて候。我等が存ずるには、仏に成たる者は、楽しみに誇りて、爰の事をば、打ち忘れ、きたき心は、露もあるまじ。又、地獄へ行かば、鬼に呵責せられ、暇少しもあるまじ。また、かやうにもなき物やらん。『世中に、妄霊とて、死したる者の来て、さま々々の事を、云ひなどする』、と承る。何れ、是はいか成事にて候や。」

一休の曰く、「されば、我も、其儀は知らず候へども、若き時、談義などを、ちと、聞き候が、人が申ほどに、誠か嘘か、知らぬ。魂と云ふものがありて、仏とも鬼ともなるげに候。其曲者が、閻魔王とやらんへ、公事奉行が手に渡り、娑婆にて

造る罪を、鉄か、銅かは、知らず。帳とやらんに付て置きて、鬼に見せて、『先づ、是程の罪人なり。急ぎ呵責せよ』、と云ふに、色々の鬼どもが受け取て、『様々の責に、逢はする由。娑婆にて、造りたる、罪ほど、責むる』、と云ふ。さりながら『毒薬変じて薬となる』、と云ふことあれば、さのみ、罪の多きも、あながち、歎くべき事にはあらず」、と、見えたり。かく、云ひし時には

造りをく罪の須弥ほど有ならばゑんまの帳につけどころなし」

と、或る時は、鬼と云ふ者も、愚鈍成ものなり。釈迦一代の、蔵経は、皆な人間を傷めんが為也。あら、面憎の釈迦殿や。色々の嘘をつきをき給へり。『それは』、と問へば、『一字も言はぬ』、と云ひ給へり。

また、『さうか』と思へば、出山の語には、『一仏成道、観見法界。草木国土、悉皆成仏、草木も仏になる』、とも云ひ、あちこちと、ひた物に身ぬけばかり、云ひ散らし。人間は、永代まよひの身に住してあり』、と思へば、又、歌ふも舞ふも法の声。柳は緑、花は紅、あら、おもしろの春の景色や〳〵、

釈迦と云ふいたづらものが世に出て多くの人を迷はする哉

（『全集』第五巻、二八八～二九〇頁）

【『一休水鏡』】

人死するといなや、焼きもし埋みもし、のけて無くなりと思へば、又も無くならずして、魂と云ふ物の来世とやらんへ行く。あら恐ろしや、閻魔王が手に渡りなば、娑婆にて造る罪を鉄の帳に付けて置きて、鬼に見せて、是程の罪人なり、呵責せよと云ふ時、五色の鬼殿が受け取りて、臼にて突き殺して、又みにてひて、人の体になして、娑婆にて罪の重き程、しやかむて聞く。

又さる者の言ふは、「毒薬変じて薬となるなれば、罪の重きは仏にやならん」

造り置く罪の須弥ほど有るなれば閻魔の帳に付け処無し

能く物を案ずるに、地獄も遠からず、鬼と云ふ物は瞿曇なり。一代蔵経は、皆な人間を痛めんが為なり。あら憎の釈迦殿や、色々の嘘をつきておひて、それを誰が問へば、「よしなの問はず語や」。釈迦出山の語に曰く、「一仏成道、観見法界、草

木国土、悉皆成仏」。草木さへ仏になるとなれば、人間は言ふに及ばず、昔々有つたと、釈迦も阿弥陀も仏じやと言ふたと、したが、嘘をつかれたと歌ふも舞ふも法の声、柳は緑、花は紅、あら面白の春の景色や、あら面白の春の景色や。

（『全集』第四巻、二九～三〇頁）

『一休水鏡』所収の狂歌が、狂歌咄において受容されていることについて後述するが、このことは江戸時代前半に成立した狂歌集においても同様であった。次節の『古今夷曲集』所収の一休の狂歌についてで考察してみたい。

次に『遠近草』に見える一休の狂歌について取り上げてみたい。狂歌咄の中に見える一休の逸話として、比較的長文を掲載しているのが『遠近草』である。本書は文禄年間前後成立と推定されている。その内容は和歌の初心者に興味を抱かせるよう「狂ある歌」を集めた物であり、当時における狂歌の広がりを知る事ができる。また、本書は『狂歌咄』（寛文十二年刊、『曾呂利狂歌咄』とも）にその大半の条が引用されており、後世の影響を知る事ができる。

＊テキストは、中村幸彦・橘英哲校訂『遠近草・元用集』（西日本国語国文学会翻刻叢書、昭和四十（一九六五）年刊）に依拠し、該当箇所の指摘もその頁数に拠る。

本書巻上第二十一話を取り上げてみたい。

一休和尚、摂津の国へいまして、ある所にしばらく滞留し給ひけるに、よはひ四十ばかりなる男のきたりて、御まへにかしこまりて申侍るやうは、「我八十にまんずる父をもち侍り。この老父七十六のとし、我が住む薗に梨をなんうへはべり。ときにわれ申やう、『八旬に及ぶ年をかゝへて、二葉の梨を育て、いつこの実をくい給ふべき。よはひ今日明日を待ちて、風吹かぬまの命ぞかし』と申ければ、『なんてう未来をいふもの哉。われこの気色にては、この梨を喰ずば、人々のちに笑ふべし』と、いきほひあまりて申侍しかば、さるまゝにうち暮らしぬ。かくて中一とせをきて、一両日なやみてむなしくなり侍りぬ。その後、日の暮れ方には、この老父存生の姿にて杖にすがり、この梨のもとにきたりて、つくゞどながめ侍る。さればこそ、この木に執心残りて、かやうにまよふならんと、さまゞにとぶらひ、心の及ぶほど善をはつくし侍れども、未だ成仏するとも見えず、仰ぎ願はくは、御慈悲にかれを渡してたび候はゞ、ありがたからむ」とぞ申ける。和尚きゝもあへ給はず、「あら不憫の事をいふものかな。それやすかるべし、仏になしてとらすべし」と仰せられて、やがて卒都婆を一本つくらせて、なに

の意趣書きもあらず、大文字に「南無阿弥陀仏なりけり」とぞ、書き給ひにけり。「これを急ぎ梨のもとに立をくべし。すなはち成仏疑ひなし」とぞの給ひける、かしこまりて木のもとに立てければ、その夜よりもふつとこざりけり。さても、たうとき御事にこそとて、一家のゆかりども詣で来て、なこたなかして喜びける。さるほどに、此ところの総政所は是をきゝ給ひて、奇異のおもひをなして、和尚へ詣でてきこゆるやう、「南無阿弥陀仏と云事は、世にひろく僧俗ともに申し侍る。六字の下に『なりけり』とあそばしけるは、いかなる御事にや、聴聞申たく侍る」と申ければ、和尚きこしめして、「南無阿弥陀仏の六字のよみを一首の歌に

みなしと心みよかしいくたびもさかしき人をはらふなりけり

なんぞ老後の梨に執心なしけるぞや、そのさかしき心をはらふべし。本来十方無我のさとりをもて、みなゝしとはをき給ふ」とぞ。

又あるとき、堺の寺にしばらくいましければ、ある人一首の歌をよみて、たれともいはずまいらせにけり。

こもりなば太山のおくへいりもせでこゝは一宇のさかいなりけり

といへりければ、一休返し

身をも身と思ふとき社うき世なれ深山もこゝもおなしかくれ家

（一三〜一五頁）

【『醒睡笑』】

後掲

【『新撰狂歌集』】

住吉の松原に柴の庵をむすびける人のもとへよみてつかはしける

107 山居せば深山のおくに住かへよここはうき世のさかひちかきに

返し

108 山居する心のつれて住ならば深山も市もおなじ隠家

【『一休関東咄』巻下第七話】

第七　堺の浦にて、遊女と歌問答の事

一休和尚、堺の浦へ御越しの時、所に、旅客（りょかく）を宿する店屋（てんや）あり。其中に、地獄といへる遊女あり。

一休和尚を知りて、一首を詠じて、和尚に奉りける。

山居せば深山の奥に住よかし爰は浮世のさかい近きに

一休、そのまゝ返歌、

一休か身をば身程に思はねば市も山家も同じ住家よ

和尚も、只ならぬ者と思し召し、辺りの者に由を尋給へば、「あれこそ、人の知りたる、地獄と申遊女にて候」、と申ければ、

和尚、そのまゝ

聞しより見ておそろしき地獄かな遊女、とりあへず、

しにくる人のおちざるはなし

（『全集』第五巻、四三九～四四〇頁）

この話は、高徳の僧である一休が狂歌を詠むことによって、亡者を成仏させる咄として成立している。一休の引導に関する逸話は、『一休咄』の中で仏教者（禅者）としての側面を語るものと言える。また、堺の寺に滞留時の狂歌は、枯淡な山居の隠者のあり方は異なる、市井の隠を詠じており、『一休関東咄』巻下第七話「堺の浦にて遊女と歌問答の事」、『続一休咄』巻四題九話「一休和尚、泉州高須の町遊行の事」のモチーフとなっている。

ほかに本書には一休の逸話が巻上第三十四話と巻中第四十九話に二話見えている。

或人、一休和尚へ参りて、物語のつゐでに、「空也上人の詠み給ふ歳暮の和歌こそ、あはれに殊勝におぼえ侍る」と聞こえければ、和尚聞こし召して、「いかん」とあれば、

行く道は次第に近く成にけり心うれしき年の暮哉

一休あぢはひ給ひて、

行く道は次第に近く遠くとも死ぬる道をばいろふべからず

（巻上第三十四話、頁）

玄宗皇帝と楊貴妃をかきける絵に、一休和尚、賛をし給ふ。その前書にいはく、「このひげ男、もろこしの主といへども、色に婬して道に闇し。貴妃にたましゐをつながれて、政を乱せり。三国に名を流して、かしこくもなき男」

この貴妃は地震の神かあらはれてつゐには国を揺り崩しけり

（巻中第四十九話、頁）

次に、『醒睡笑』に見える一休の狂歌について見てみたい。

＊テキストは、鈴木棠三校注『醒睡笑』（上）（下）（岩波文庫）依拠し、該当箇所の指摘もこれに拠る。

①

一休、住吉の松斎庵に居住の時、住吉と人はいへども住みにくし銭さへあればどこも住みよし

（巻之四（18）、上巻三三三頁）

②

一、一休伊勢の浅熊にしばらく住山ありし。常ならぬ人の様に沙汰しあへり。山田の宿老たる人、親の心ざしをつとむる時、斎をまいらせけるに、白衣にて渡らせ給ふ。見るから驚き、「これは異なものや。不思儀の風情なるかな」とささやきぬるをききて、斎終りに硯と紙を乞ひ、

きたりとよ心の内の墨染を世わたり衣うへにこそきね

（巻之六「推はちがうた」（4）、下巻六一頁）

③

丹波の国大の原にて、洞家の僧、一休に向ひ、「如何なるか是、紫野の仏法」。「桔梗、刈萱、女郎花、紫苑、竜胆、我香」。「如何なるか是紫野の魔法」。「愛宕嵐に比叡の嵐、奥は鞍馬の山颪」。

（巻之八「頓作」（8）、一七八頁）

④

一休、住吉に松斎庵といふ小庵を結びておはせし時、何者やらん、その名を書かずして、短冊を送ることあり。

あたら人深山の奥に住ませばやここはうき世の堺ちかきに

返歌、

身を身とも思ふほどこそうき世なれ深山も市も同じ隠家

（巻之八「頓作」（12）、一八〇頁）

『醒睡笑』に見える一休の話は、③は狂歌ではないが、江戸時代初期における狂歌咄の中の一休像を知る手がかりとなるように思われる。

三、狂歌集に見える一休の狂歌

『古今夷曲集』十巻四冊は、生白庵行風が編纂した、江戸初期の狂歌集であり、寛文六年（一六六六）に刊行された。構成は春・夏・秋・冬・賀付神祇・離別付覇旅・恋・雑上・

雑下・釈教の十巻の部立で、歌数一千余首に及ぶ。作者は古今貴賤僧俗男女二四〇人余にわたり、特に釈教歌が多いのが特徴であり、中世以来の僧侶の道歌が多数入る。付載の「作者之目録」によれば、禅家では、

仏心宗
天竜開山夢窓国師六首
建長開山隆覚大禅師一首
永平開山道元和尚廿一首
松島開山法心上人一首
一休和尚十一首
沢庵和尚八首
雲居和尚十七首
雄長老世二首
永源寺比丘一糸一首
寒山寺瑞南和尚一首

と見え、又「右内出所古書目録」によれば、「一休水鑑五首」とある。『古今夷曲集』には、一休の狂歌が十一首採録されており、そのうちの五首が『一休水鏡』からのものであるとする。しかしながら、『古今夷曲集』には、一休に関連する狂歌がこれよりも多く採録されている。以下、一休関連の著作に見えるものを掲げれば以下の通りである

＊テキストは『七十一番職人歌合　新撰狂歌集　古今夷曲集』（新日本古典文学大系、一九九三年刊）に依拠する。

一休和尚

9 餅つかずしめかざりせず松たてずかゝる家にも正月はきつ

雪の降る日、引導せられし時、鍬の先抜けけるに、よめる

945 三界の苦は抜け果て今こそは浄土の道にゆきぞかかれる

題知らず　読人知らず

965 画像にも木像にもよく祈る身は病難四苦の遁れやはある

『一休和尚法語』（54）　（『全集』第四巻、九一頁）

夢窓国師

968 寺を建堂を立たる功徳より只常々の慈悲やましなん

『一休和尚法語』（55）　（『全集』第四巻、九一頁）

有空不二の心を　平朝臣時頼

1008 ありのみと梨といふ名はかはれども食ふに二つの味ひなし

『一休水鏡』（14）　（『全集』第四巻、三一頁）

水鏡の中に、「毒薬変じて薬となれば、罪の重きはかへり仏とやならん」と書てよめる

一休和尚

1019 作り置罪の須弥ほどあるなれば閻魔の帳に付所なし

『一休水鏡』（9）　（『全集』第四巻、二九頁）

鎌倉追罰の勅を請て、出立たれける時、餞別に読て遣しける

夢窓国師

1020 餞別に何をがなと思へども本来空の一物もなし返し

源　尊氏

1021 一物もなきをたまはる心こそ本来空の法味なりけれ

1020 1021 ↓『一休咄』巻一（『全集』第五巻、二二頁）

達磨の絵に

1024 悟りぬるきやつめが身とて何かある変哲もなき豁骨（あばらほね）哉

水鏡の中に

1025 嘘をつき地獄に落る物ならばなき事作る釈迦いかゞせん

『一休水鏡』（6）　（『全集』第四巻、二八頁）

（一休和尚）

1026 己れさへ熱気払はぬ不動めが悪魔降伏無用也けり

『一休水鏡』（15）　（『全集』第四巻、三二頁）

読人不知

1029 あら楽や虚空を家と住なして心にかゝる造作もなし

『一休和尚法語』（4）　（『全集』第四巻、六九頁）

一休和尚

1031 たそにたそたそ〳〵にたそたそにたそたそにたそとて何もなき哉

題知らず

弘法大師

1032 今ははや後世の勤めもせざりけり阿吽の二字のあるに任せて

↓『一休和尚法語』（6）

（『全集』第四巻、六九～七〇頁）

※『一休咄』巻二第五話「五、同　大名に引導を渡す事」に

我はたゞ後世の教へを知らぬなり阿吽の二字のあるにまかせて　（『全集』第五巻、五一頁）

水鏡の中に　一休和尚

1033 万法をみる人ごとの喉かはき思はで水を一口にのむ

『一休水鏡』（20）（『全集』第四巻、三二～三三頁）

（一休和尚）

1034 なき跡のしるしに石がなるならば五輪の代に茶臼切れかし

『一休水鏡』（16）　（『全集』第四巻、三二頁）

本来意を問て、よみて遣し侍りける

1036 すぐなるもゆがめる川も川は川仏も堂も同じ木のきれ返し

1037 直なるもゆがめる川も川は川仏も下駄も同じ木のきれ

※『かさぬ草紙』（六十二話）に類句あり

「借用之地水火風、返弁申今月今日」といふ前書きにてよめる歌

1045 借りをきし五つの物を四かえし本来空に今ぞ趣むく

『一休咄』巻四第十三話（『全集』第五巻、一四三頁）

『かさぬ草紙』には、『一休水鏡』と共通する狂歌二首が取り上げられていた。その版行の状況を勘案すると、江戸時代初期においては、一休の狂歌と言えば、『一休水鏡』『一休骸骨』所載のものが中心であり、それは、『一休咄』版行直前の状況も変わりはなかつた。上掲の通り、『古今夷曲集』に収載された一休の狂歌は、その過半が『一休水鏡』所載のものであり、また『一休仮名法語』からも取られていることがわかる。それが『一休咄』版行の後は状況が一変する。

『後撰夷曲集』は、「古今夷曲集」の後を継いで、同じく生白堂行風が編纂し、寛文一二年（一六七二）に刊行した狂歌集であるが、収載された一休の狂歌はすべて『一休咄』所載のものであった。

巻八

一休和尚

972 人は武士柱は檜魚は鯛きぬは紅梅花はみよしの

巻九　無常

一休和尚

1434 いつの日のいつの時にか出来る房めくり〳〵て後はかつたり

↓『かさぬ草紙』

巻十　釈教

1466 此度はいそぐといふに長袖の蛸入道の道のをそさよ

『一休咄』巻一（『全集』第五巻、三四頁）

善導の讃に　一休和尚

1490 くろかりし衣の色の黄になるは善導大師はこやたれけん

『一休咄』巻二（『全集』第五巻、五七頁）

一休和尚

1669 仏法は鍋のさかやき石のひげ絵にかく竹野ともずれのこゑ

『一休咄』巻一（『全集』第五巻、頁）

親月とて、都の町に松たてわたし、しめかざりしていはう折から、されこうべ抱きありき給へるを、或人の見て、「こはいかに」と申しければ、返事によめる、

1673 にくげなき此されこうべあなかしこめでたくかしこ是よりはなし

『一休咄』巻一（『全集』第五巻、四八頁）

【参考】

夢窓国師

1672 心とは何にをいふらん不思議さよ墨絵にかける松風の音

勿論、『一休水鏡』が全く取り上げられなくなったという事では決してない。この点については、次稿において考察してみたいと思う。

（＊この稿続く）

註

（1）『一休和尚全集　第四巻　仮名法語集』（春秋社、一九九九）

（2）柳田聖山『一休』（『日本の語録』一二、講談社、一九七八）

同右『一休・良寛』（『大乗仏典』二六、中央公論社、一九八七）

平野宗浄『一休和尚全集　第一巻　狂雲集（上）』（春秋社、一九九七）

蔭木英雄『同右　第二巻　狂雲集（下）』（春秋社、一九九七）

（3）拙稿「一休宗純研究ノート（一）「示栄衒徒」法語をめぐって」（『駒澤大学佛教學部論集』二九号、一九九八・一〇）

（4）土井哲治「現存『自戒集』の成立」（『国文橘』一四、一九八七・一二）

堀川貴司「第一三章『自戒集』試論―詩と説話のあいだ―」（『詩

のかたち・詩のこころ―中世日本漢文学研究―』、若草書房、二〇〇六）

拙稿「一休宗純研究ノート（二）――『自戒集』註釈（上）――」（『駒澤大学佛教學部論集』三二号、二〇〇一・一〇）

(5) 拙稿「一休宗純の印可観について――『自戒集』をめぐって――」（『印度学仏教学研究』三七巻二号、一九八九・三）

同右「一休宗純の罪報観――『自戒集』を中心として――」（同右、四〇巻一号）

(6) 注（3）参照。

(7) 平野宗浄「一休和尚年譜の研究」（『禅文化研究所紀要』七、一九七五・九）

今泉淑夫『一休和尚年譜』1・2（平凡社、東洋文庫641・642、一九九八）

山田宗敏『大徳寺と一休』（禅文化研究所、二〇〇六）

(8) 岡雅彦『一休ばなし―とんち小僧の来歴』（平凡社、一九九五）

(9) 文中に「文明十戌戌七月廿六日」（上冊、42ォ）、「文明十一己亥九月十八日、東山霊泉院談義」（中冊、13ォ）、「文明十四年壬寅二月五日、東山開山塔護国院之講」（下冊、20ォ）、「臈月十日」（下冊、70ォ）等の記載が見える。又、「長亨改元丁未閏十一月廿六日、已下一篇前年闕焉」（上冊、2ォ）、「長亨改元丁未臘月降魔日、已下三篇補前闕」（中冊、45ゥ）とあることにより、長亨元年に補訂されていることがわかる。

(10) 拙稿「『大徳寺夜話』について――養叟会下の記述を中心として――」（『宗学研究』三四、一九九二・三）

同右「龍谷大学図書館蔵『大徳寺夜話』をめぐって（一）～（四）」（『駒澤大學禅研究所年報』一〇～一五、一九九九・三～二〇〇三・一二）

(11) 拙稿「大東急記念文庫蔵『碧岩録古鈔』について」（『曹洞宗研究員研究紀要』二四、一九九三・九）

拙稿「『江湖風月集』研究ノート（一）」（『駒澤大學禅研究所年報』一八、二〇〇七）

(12) 「大徳寺派系密参録について（六）――駒澤大学図書館蔵『百則』・『五十則』の翻刻――」（『駒澤大學佛教學部研究紀要』五九号、二〇〇一・四）

(13) 注（10）参照。

(14) 拙稿「禅籍抄物研究（二）――『大圓禪師垂示夜話』をめぐって――」（『駒澤大学佛教学部研究紀要』六二、二〇〇四・三）

拙稿「禅籍抄物研究（六）――駒澤大学図書館蔵『大圓禪師夜話』について――」（『駒澤大學禅研究所年報』二一号、二〇〇九・一二）

(15) 拙稿「叡山文庫蔵『碧巌休岱記』について」（『宗学研究』一九九七、三）

同右「禅籍抄物研究（三）――叡山文庫所蔵史料について――」（『駒澤大學禅研究所年報』一六、二〇〇四・一二）

(16) 『勢陽雑記』にも、「開山大空玄虎禅師、其頃曹洞卓立の道人にて、世挙げて伊勢の虎蔵主、京都紫野大徳寺竜蔵主とぞ尊敬しける、云々。〈竜蔵主は、一休和尚事也〉。」とある。

(17) 拙稿「駒澤大学蔵『臨済録抄』について」（『曹洞宗研究員研究紀要』二三、一九九二・九）

同右「尊經閣文庫蔵『臨済録抄』について」（『宗学研究』三五、一九九三・三）